物よりや如積いつるさとさはしこゝあるを所謂銀瓶
を破水聚逆帰この書はしまりて明を凡雖長此道
之者一両月も弾後粗可知其書之測源徹心跡五
色之聲幽八音之調終以曲調西三者不可測之淺深
遅々如不登高山不下知天之高之上数年経蔵の蔡にう
はもまして手ならされさる多在之中愁今日雖注之
奥備後代亀鏡

以西園寺敏公相公自筆之本書寫之畢

八音抄

古き名物のうち世乃中に殘ける八ゆるを雲上内裡
牧馬良道木絵小琵琶已上勝光明院宝蔵井手渭橋平等院経蔵
元興寺本平等院経蔵西近代九一院御物特□比巴ト胡行横笛一笈ト二石代云々以上皆め
てたき物ホ也小琵琶ハ書ちいさよりける木よりて
知足院殿の御時うちをくりたるも書いてこさな
んとて有行といふ陰陽師ありて御占あるとて
慶教僧正と申ける人ありて古き人して御行あるを
腹とはなちてうち殺くらまして聊着出来るより
と日記にあるもとりやこさしおさまりを読しき

義元二年八月十四日三条白川乃御所院宮
法而ゆくはるしころ儀ゆめしあるて条ゆ
しにおの小琵琶と大隅ちやまれりといふ物ゆ
いさせおくしまし高さ高さのちいさく
おれしめを腹ともなれちかふへくハかへもし
いかゆもしこ忘大ゆ所してまいらせよと仰
はるしかハ是ハ世はかるてひと沙法ゆる事
なり今いふかひ所くひ身まていかく作意ゆ
むといふこゝかしかしもたくいかゆもしてこ来
大ゆなしてまいらせよと給ふるしかハうちか

熱しきさかへし引なくしてよるくみしに
霞手の悪さと見いたしてこさゆまの来ゆく
はつくにくさけゆ作ゆ部さくと法ゆたるし
かゆ白辛の来ゆてゆるかゆ作ゆく消けてこゆ
あやまこし出来もせんとおひてそのよし我
申しかゆ御して霞手ゆかりなりゆまさやか
にとゆく作ゆふ熱さよし仰あるしよるまて
霞手作ゆへて同月十八日消ゆて持て条ゆ
るしかゆ神泉へ清幸なるしかし是法ゆ
小法而ゆ作まうゆゆて見参にいまゆるし

うた比巴浦くろ知るく糸たりやと給ひけるし
叩は急して糸てくとゆしかを浦前に人
少く作しうちなるい忍まい進とめして比巴
黄鐘調に志るへ河そくして西覚して家の
家いかに伴ひけるしかハめてきくは本乃言
に八露もくはあしぬ物にしとゆしかを
常道ハいかゝいふと来工権政清実に浦局あ
ましかを利口しひけん者ハ半分くも中人
ぬ進とも三分一ハこ忍出来てひとおもへ
とゆひとゆしかを又志をしけそくしてよく

まく日中さむ老ま三分か二ハ出来るりとれ
知てむ先てたし物と給あるてやうていしせ
たるし由しかハ人々阿蘇くしあるを先て
さ高名いかゝしなと口々にいひあるをり
こさなる家ハさせるその事にきへしるにハ河ら
祿とも物とよるく聞志りしまるをの
光君もたりし先しきるを又実にもさあれ
さりしさ物なりこ進ま身にとりてハ今を
昔もなき程の高名とこ取れ中ゆ進琵琶を
作らむと志をさの八三分作様も昔をよき

物ともなりてこまとしてこそ写せ物なれ中比
よりの物ともハ一としてこまとハ似いとうる
もなし作様よりはしめてこ忘もさせる事
なき物ともなり蓮華王院の寶藏ハ賢圓
法前丸とて二あるを賢圓法ことし書うつし
なれども雑木の甲ハくみめいとあやしけな
ま甲ハ素法ニ腹ハ志ろ矢なる槻乃法さ腹
乃口ましるさせまれハ目のとおを程よ如さかる
なるゝ乗しの木紙入まり法前ハ紫檀尤
伏甲なりうちさくたる法ハとによさ物なるも

既ハ寶物ましなりにまるもさまさまさしてこ二
三日も起さなる屋しては書りをむまるもの
なりとこ紀是ハ申しきれこ乃中様なる
近来乃大殿ニ下ホ十二時と以ふ法比巴あ
ま雑木法甲のこめ書たるなる比巴形り此
外我もしくとよ紀物ちまり事ハ思ひけ
ゑてまと皆指事なし必よさ琵琶引給と
まるとてよ紀ゆあるまし事まとも思へ
らまハよかるむまれふまさまや其とひ事
心屋ら形しまハこめたれもさる様よあるた

きそなし　右のころ世にある比巴のよそみくるは
腹をうすくて二ツくし　前にわく　先きたるも
後うまをきをきこ清そきこ濤とりしたるもよにあ
し　把とあり　若は末も性のようなる　前まはせうく
誰なこころしまるも　何しかしまは世にまの忘せ
末にて　琵琶法ならむまはかまへて作ころまはま
し　箏は三分　琵琶は四分と細工はいひをきたると
よやいへども四分に作ちん　比巴はいこ法し物なり
四分といへれす法の法なりよろ法の事を四分に
てたるしぬへきをいふなる故し　甲の厚さは常

なるむ定六七分に　おとまし　右下格はよかるん　琵
琶の引急をとりて作まはしてそのたるさは一寸二
分ちかり　左山にはるは面かし　落常のしたの程を
今一分ちかるもをとりたるなり　にまつきの面
は四分に　よそ把ゆ　やうちの物さは五分にい
きたるゆとまこします　絃を　かるもたるゆうに忘るん
しまくに忘るもたるは　ひろしなりのくやさは　れ
ゆ格甲の外は　あるにいきあふ程にまへし　二に　やく
らは　中厚に　すくもゆくゆにすくまへ
かしまを　山のうるは　すうしうすく　ぬくしきの方

ハ厚さ根ハ心かくへしいふんハ[illegible]方ハ厚くを
たきうて冬うまくそつろけあたせんまうなるまさ
まハいきふうまいよくあるへきなり頸の根ハ志ことを
忘れ乃志をこと一寸又六分ハまくましせきをく
くこと撥面の中まとこの方と云る趣し中まとこより
上へよる趣から次二ハ上へよるへし廣さ方ハ
志もといふせきれきうるまよりて来れまし
けしハいまさくるもいてさすをきそいてまへし
かたうす又やうらかなし次来のまとこしいさめ
あしむよしせ紀ハ別の柱をたさ夏ゆしきる所

さある趣しとも杉本ハ紀物とも乃ハ別の柱銭
まうてきさみのさしきるなるさ二寸たりも一寸四五
分を行るけなりまへく甲腹の来すさしたくまさ
らたせきハ如くくもさしたくもんさ次趣し甲
腹かたくさゆうすきたしたくつろうままへし腹
をこ乃さろ法巳乃中うまとふまつるたるあるまふ
悪しけやまりてハ中ハよく厚なる趣しとこそ杉本
ゆまたくうち銭をかさ板の根ハまくうはくしを
削くせ紀ハ[illegible]まうなれハいくらも如こ[illegible]
めくりをたまさかとまに削なしつまハまさし中河

はなれし腹の事かさねて古実候ことに入替し
言上申とハさる事ハあれ共近年腹巻する時の下に者
はきの衣裳よくしんとりし肝心ハそこなる言
上の修理の皮に書のまするハつくの並様よるまて
あつかうこは色の皮よりくて勢候事ハかくことに未熟
よきあつかいにく厚きるよし頸まきとくしるかるき
よしいかく申さるる儘し撥面ハ厚かるべしらすく
かくしたる皮よりこのこ忍ハ桃色そくかことた人に
書はあつき厚ように随て好みをを替し古きは色の気
好まき実近年一も人にとひしる事なりしいはくの品

よ形るかよしあしといひとひる人もなうし只廿余年の間
品に入てまめさせる事にたうらし出入にかからくしてみて
ゆきたる品くもみゆるたくよりくはいをとれかく見
損しらる物をはくろひにくみする物へ入たり は色き
四五尺もさしはきても村らし古悪ハこまるなり
御してちしと大指の先をさしはさくうちにもあし
迄え蒸らの不審をかしく腹をとこと厚とろ
たくとさて写に折御覧よとりくしとある撥面の
かるゝ様をと文たる弟をかくしてるさて涕とくあるう
よききみのいはくも一指に写ハあるし 同の下撥面の

かみの程をゆるうまなるを撥面の下ハかくてなるを若
となり一様にとハかくてもやはらうれも撥面の下と
目の志も乃同躰になる事之腹のそのまハむしらもな
きう若なり撥面の本とのかくて高ハその下と乃う
をきかさハ河る好り目の中の本といくてたう若きを
結ようたまくかしめく事あるといくて持るを見たる
者は正しき好し隠月と目光ハいかく知る事し
牧馬ハ面の目鼻にかつりあまりまたり隠月も知ろ
けまとも己志よしうまハ面ちの事之雲上牧馬な
ぞふなりぬまをいはくいうなりといふ事あるまし但

雲上ハ以洲をもそれたく作りこめうつくしき比色
なるをさまをこ志も牧馬ハ遥に海さりまるにこう
牧馬も甲後ともみめくてたさ物なまとも雲上に少し
作様をとりたることも河まをこ和も知としかし然
にや嫌るを記にハその事雲上とおなしかたのを乃
なりと河まとのを所ハ雲上ハ海さりたるとをこ西
又さる物語乃河るうとよ無しうの事ハきかしくも
嫌るくかなり洲しへそり井手ハなんへくの比色より
ハそれにこの外にひきにて後に甲六分なるをあるを
後のそり時に高しそまにまりて履手ぬくしを

たとへ覆手のたかさハまへて四分とこそ申せども
撥の柄ハ其寸法にかなひ撥てあそびたりとも防ぎて井手ハ
ちからたりぬハ防ぎても音違ひとこそきこゆめてみゆるつくし
音も律ならつぎしきかう律なるしくて弁(?)隨し
きなりいふべしと格別由(?)違ひとも音勢もあつて甲の方は
めでたき鳴るといはれ候へどもしむみゆる所ハ題(?)殊に末たえ
目たる曲なよなりけるやうなんとあることある音違ひなよ
曲違ハ聖(?)てその定まなあしきうち律したゞしむ法巴(?)をも
以あくよかしきをやあしむ音をなすへて善悪さ
ますなやくまんもらむきもしてよろしんとめでたし

案じて法巴ハ作者さゆ其ゆへ古き門弟ならのくを
作るく善悪を末々かいなろきてうくおろの為なる事なり
其くし雑木ハちかくるはしよろしくちかうなる案し
めくらして造する程よ四ちのちの絃ならしくまて忽
叶する甲腹厚く覆手高なく頸細くさ法巴ハ音
ちいさくして三四の絃ハよまあのて一二の絃ハあまくれ
撥掌しまく覆手厚つららも頸ふとくみなりぬ撥ハ
一二の絃ハ音勢ゆまてる三四の絃あまくれきまへてあり
かしきさ琵琶ハ一二の絃まあしおろの形のくち
なるハ三四の絃ゆへてきも一二の絃ハよろしく音高

たゞしきくてひろしされは腰ハ行つくてをつ
ろき霞手ハ穿まくて叩くく頸ハ布そくて法よき
かよかる魚或ゆらむ
如此注意之曰建保四年夏乃比源大納言發之
行しかゝまをする薩梨末甲の比巴に紫檀姫をなく
世法あつくあるしかれ姫せしに色の後をとて
笛遣たこと後を姫を母をまるに後なし私乃比巴に
姫せらるし腰乃こ来ハよくて一の絃れと来あし
き後腰乃あしきとてまとてたるしを志たしとて
ふせて見遣ハ本体よくなるもて一の絃もいて

くよりなる志遣後案まるに師子(私物)丸ハ見かまつき
うすき比巴なりこれ紫檀乃ハ見かまつき行謂さこと
行を志遣まよるもて一乃絃のと忘乃よりなり幸新
見出うとくそのちにかまつきをよ絃をとまれ
らひて後一の絃よく好る又いてくしかれ謂さ
あつきは一二の絃ハ左右なし三分よきなと好りに
とるもて落筆の志るなとハ四分見かるもたるなとなる
なし

内閣文庫

群書類從卷第三百四十九

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan